様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月　16 日現在

機関番号：13101
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2012
課題番号：20520613
研究課題名（和文）　朝鮮新式戸籍に関する史料学的研究

研究課題名（英文）　A Study of Korean Family Register in Konyang-Kwangmu period

研究代表者
山内　民博（YAMAUCHI TAMIHIRO）
新潟大学・人文社会･教育科学系・准教授
研究者番号：40263991

研究成果の概要（和文）：
本研究は、19 世紀末から 20 世紀初頭の朝鮮で作成された新式戸籍の史料的性格を、とくに僧籍・屠漢籍など特定の社会集団や地域的偏差に注目しつつ分析した。新式戸籍制度は理念としては法的な身分制廃棄に対応して民の一元的な把握をめざしたが、実際には僧と屠漢はほかの集団とは区別され独自の戸籍で把握されるなど、一元的把握には限界があり、身分制解体には収斂しない 18 世紀以来の変化を反映していることなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This research aimed to analyse the characteristics of Korean Family Register in Konyang-Kwangmu period, from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century, focusing on Buddhist monks, *Tohan* group and regional differences. In spite of the idea to register people unitarily, family register of this period organized and registered monks and *Tohan* by the style peculiar to them reflecting the change through the late Chosun period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：朝鮮史
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：朝鮮史・韓国史・戸籍・身分・アジア史・東洋史

１．研究開始当初の背景

朝鮮王朝では 3 年ごとに各郡県を単位として戸籍が作成されていたが、1894 年の甲午改革にはじまる各種制度変革の中、1896 年には新しい戸籍制度が定められた。1896 年以降の戸籍は従来の戸籍（旧式戸籍）とは様式や作成方法が大きく変更されており、新式戸籍と呼ばれる。新式戸籍は併合直前の 1909 年に

民籍法が施行されるまで作成され、その一部は韓国及び日本の研究機関・図書館等に現存する。

新式戸籍は近代変革期の朝鮮政府が人々をどのように把握しようとしていたのか、戸口政策を具体的に示すものであり、また社会の実態を何ほどか反映する重要な史料である。にもかかわらず、これまで国内外ともにそれほど注目されてきたわけではない。首都漢城府の新式戸籍に関してはまとまった研究があるものの、そのほかの地域については若干の事例研究がある程度であり、新式戸籍の性格に関する考察は戸籍法制と漢城府など二、三の地域の戸籍の分析によったものにとどまっている。新式戸籍のもつ様式上、記載内容上の多様性ーたとえば新式戸籍時期には僧籍・屠漢籍といった特定の職業を対象とした戸籍の存在ーにはほとんど関心が払われてこなかった。甲午改革により身分制が廃止され、新式戸籍もそれに対応していると一般に考えられてきたが、当時賤視されていた屠漢（屠牛を生業とする人々）をはじめ、特定の職業集団については別途戸籍が作成されていたのであり、これは身分制をめぐる理解の再考へとつながる問題であると考えられる。

総じていえば、新式戸籍が全体としてどういう史料であり、従来の戸籍に対しどのように異なっているのか、事例研究は十分でなく、その歴史的性格は依然明らかとはいえない。まずは新式戸籍という史料を丹念に吟味する史料学的研究が必要とされているのである。

２．研究の目的

本研究課題は、19 世紀末から 20 世紀初頭の朝鮮で作成された新しい様式の戸籍＝新式戸籍の史料的性格を検討し、この時期の朝鮮国家の戸口把握・支配の特質と、戸籍にあらわれる朝鮮社会の様相を歴史的に明らかにすることを目的とした。

具体的には、第一に、基礎的研究が不十分であった朝鮮新式戸籍につき、旧式戸籍と比較してどのような特質をもつのか、僧籍・屠漢籍など特定集団の戸籍や地域による差異にも注意しながら明らかにする。

第二に、上記新式戸籍の性格に関する検討にもとづき、甲午改革によって身分制が法的に解体されたという理解を再検討し、19 世紀末段階で国家が人々をどのように編成していたのか考察する。

第三には、新式戸籍の記載内容を分析し、当時の戸口、面・里の様相の復元を試みることである。

こうした検討の成果は朝鮮王朝期の戸籍（旧式戸籍）の性格にも新たな理解を示すとともに近代と身分制、あるいは国民統合と身分制との関連をめぐって新たな論点を提示することにつながることが期待されるであろう。

３．研究の方法

(1)　朝鮮新式戸籍の調査・収集

朝鮮新式戸籍及び関連史料は、国内では学習院大学・京都大学・天理大学・東京大学・東洋文庫・一橋大学・早稲田大学で所蔵が確認されている。韓国ではソウル大学校・国立中央図書館・国史編纂委員会などの機関に現存している。こうした機関での調査と公刊史料を含め戸籍および戸籍関連史料の収集を研究期間中、基礎的作業として継続的におこなった。

(2)　分析対象戸籍の選定とデータの整理・分析

調査・収集した戸籍について、戸籍の種類・地域・年度および旧式戸籍との連続性などを考慮して以下にあげる戸籍を対象として選定し、データの整理・分析をおこなった。

①僧籍

寺庵ごとに僧を収録している僧籍については入手可能なすべて（16 地域）について調査し、分析の対象とした。また、旧式戸籍時期に僧がどのようにあつかわれていたのか検討するために、僧が継続して登載されている慶尚道大丘府と蔚山府の旧式戸籍も分析の対象とした。

②屠漢籍

屠牛を生業とした屠漢を収録した屠漢籍も現存するすべて（慶尚北道蔚山郡・全羅南道宝城郡・江原道春川郡の 3 地域）を分析の対象とした。

③戸籍表・統表

数多く残る一般の戸籍表・統表の中から、同一年度の戸籍表・統表と僧籍が残る忠清南道泰安郡と、これまで検討の対象となってこなかった北部地域のうち咸鏡南道端川郡の戸籍を選び、分析した。

４．研究成果

(1)僧籍の歴史的性格

新式戸籍制度の特徴のひとつに僧のみを収録した僧籍の存在がある。「朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格」（上）・（下）（雑誌論文⑤、④）では、僧籍の歴史的性格を明らかにするため、慶尚道大丘の旧式戸籍大帳、慶尚道蔚山の旧式戸籍大帳と新式の蔚山僧籍を分析対象に、17 世紀後半から 20 世紀初にかけての寺・僧把握の推移と寺・僧の具体相を検討した。

まず「朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格」（上）では、大丘府戸籍大帳の寺・僧記事について、寺・僧把握の推移と寺・僧の具体相を検討し、17 世紀から 19 世紀後半にかけて僧を一般戸口とは異なる集団として把握する傾向がしだいに強まっていたことなどを明らかにした。

「朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格」（下）では 17 世紀末葉以降の蔚山旧式戸籍中の寺・僧記事、及び 19 世紀末 20 世紀初の蔚山僧籍を分析・検討し、旧式戸籍と新式戸籍の寺・僧把握の連続性、新式僧籍の一般戸籍にたいする独自の性格、戸籍にみえる僧集団や居士など寺庵居住者の特徴などにつき明らかにした。朝鮮戸籍の寺僧把握を長期間にわたり追跡したはじめての研究であり、近世から近代初期の身分制を考える上で重要な情報を提供するものであるといえる。

(2)新式戸籍関連諸資料の総合的検討と戸口の事例分析

新式の通例の戸籍表、戸籍表の戸に関する情報を整理した統表、寺庵・僧侶を記載した僧籍の相互関係について分析を進め、その成果として「朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的研究（1）」を発表した（雑誌論文③）。同一年度の戸籍表・統表・僧籍が残る忠清南道泰安郡地域を選び、相互の関係と記載・把握の特徴について分析し、この 3 種の史料が一体のものとして作成されていたことなどを明らかにした。また、泰安郡の戸口記載の特徴を分析し、多くの漏口が予想されることなど戸口の具体相を提示した。僧籍を含め戸籍関連各資料の相互関係を具体的に明らかにしたはじめての研究であり、新式戸籍の性格を究明する上で重要な意味をもつものであるといえる。

(3)咸鏡道地域戸籍の検討

これまで研究の対象となっていなかった北部咸鏡道地域の新式戸籍を対象に史料の整理・分析をおこない、その成果として「朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討（2）―建陽元年咸鏡南道端川郡新満面戸籍―」（雑誌論文②）を発表した。新式戸籍初年度にあたる建陽元年(1896 年)の咸鏡南道端川郡の戸籍を、面里の具体相を含め分析したものである。その特徴として挙げられるのは、1 戸あたりの口数が他地域に比べ顕著に多い点であり、それは傍系親族と寄口（非親族同居者）が多数登載されることによっていた。また、戸内の人口は必ずしも一つの家屋に居住していたわけではないことも推測された。これらの点は新式戸籍の戸に対する把握方法が地域によって異なっていたことを意味する。また、端川を含め咸鏡道地域は 18 世紀から 1 戸あたりの口数が多かったことが知られており、旧式戸籍と新式戸籍の把握方式の連続性を予想させる。

(4)僧籍・屠漢籍からみた新式戸籍の性格

本研究課題の成果をまとめる意味をもつ論文として「建陽・光武期僧籍と屠漢籍の性格」（韓国文）を韓国の学術誌に発表した（雑誌論文①および学術発表①）。建陽・光武時期の僧籍・屠漢籍を整理し、長期的な視点から新式戸籍の性格を考察したものである。まず、現存する僧籍と屠漢籍を網羅的に整理した上で、それらが同時期の戸口調査の一環として一般戸籍とともに作成されたこと、ただし一般戸籍とは区別されており、この時期の戸口は一元的には把握されていなかったことを指摘した。さらに、そうした把握のあり

かたについて僧侶が戸籍に登載されるようになる 17 世紀にさかのぼって検討をくわえた。17 世紀後半には僧侶や屠漢と関連の深い柳器匠・皮匠は良賤制的枠組みの中でほかの職役集団と同じように把握されていたが、18 世紀後半頃から僧侶や柳器匠・皮匠を戸籍上で区別する傾向が強まっており、僧籍・屠漢籍を含む新式戸籍が朝鮮後期以来の変化の延長線上にあったと結論づけた。

(5)その他

以上のほかに、「一七世紀初慶尚道蔚山府戸籍大帳と降倭」（雑誌論文⑥）は、17 世紀初頭の蔚山府戸籍大帳にみえる降倭（日本出身帰順者）をとりあげたものである。同戸籍大帳において降倭はほかの職役集団とは明確に異なる記載方式をとっており、良賤制的把握の例外となっていた。新式戸籍およびその中で例外的扱いを受けていた僧・屠漢に対する把握を考える上で関連をもつ研究成果である。

以上の成果は従来研究の少なかった新式戸籍および近代変革期の身分制変容についてあらたな理解を提示するものであり、韓国における学会発表でも関心をよび、また韓国の学術雑誌にも論文が掲載された。本研究では新式戸籍における僧・屠漢の位置に注目したのであるが、今後はかれら以外の周縁的性格をもつ集団を対象に、時期を朝鮮時代に広げ、良賤制から身分制解体へという通説的理解の再検討を進めていくことを課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 山内民博、건양・광무기 僧籍과 屠漢籍의 성격（建陽・光武期僧籍と屠漢籍の性格）、韓国学研究（仁荷大学校韓国学研究所）、29 号、2013 年、671―704、査読有
http://www.inhakoreanology.kr/science/kor_study_dn.php?sq=38&att_sq=349

② 山内民博、朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討（2）―建陽元年咸鏡南道端川郡新満面戸籍―、資料学研究、9 号、2012 年、34―50、査読有

③ 山内民博、朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討（1）―忠清南道泰安郡新式戸籍関連資料―、資料学研究、8 号、2011 年、39―55、査読有

④ 山内民博、朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格（下）、資料学研究、7 号、2010 年、34―57、査読有
http://hdl.handle.net/10191/17329

⑤ 山内民博、朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格（上）、資料学研究、6 号、2009 年、1―24、査読有
http://hdl.handle.net/10191/12977

⑥ 山内民博、一七世紀初慶尚道蔚山府戸籍大帳と降倭、日韓相互認識（「日韓相互認識」研究会）、2 号、2009 年、1―24、査読無
http://hdl.handle.net/10086/18258

〔学会発表〕（計１件）

① 山内民博、僧籍과 屠漢籍을 통해 본 新式戸籍의 성격（僧籍と屠漢籍を通じてみた新式戸籍の性格）、仁荷大学校韓国学研究所　第 16 回東アジア韓国学学術会議、2012 年 2 月 23 日、仁荷大学校（韓国）

〔図書〕（計１件）

① 山内民博,他（朝鮮史研究会編）、名古屋大学出版会、朝鮮史研究入門、2011 年、165―174。

６．研究組織

(1)研究代表者

山内　民博（Yamauchi Tamihiro）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：40263991